

福岡大学 医学会ニュース

No. 45

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

定年退職の あとさき。

名誉教授 前解剖学第二教授
三好 萬佐行



この春、丸々三十年間の在職で、定年を迎えて退任しました。前は、自殺するつもりか、こいつに見せとけ」と主治医が看護のひとに言っているのを聞きながら、モニターに流れる、期外収縮一杯の心電図を見ながら、冷汗を流していました。今回は、ある最大の大学、九州大学に近い将来独立大学法人として、新出資することもあり、同じ生命科学の学部をもつ福岡大学の将来運営について、自分なりの考えを理事長にお伝えして、大学人としてのけじめとさせて戴きました。大学のことを、夢に見ることがありますが、奇怪なことに、出てくる研究室もキャンパスもすべて三十数年前にいた、新潟大学の場面ばかりです。三十歳代の記憶は執拗ですね。三月の下旬、退任記念会や友人同志の送別会をもって戴いたあとで、自分の体の健康検査と、もし不具合なことがあったら、その治療もしてもらうことにして入院しました。その頃のことです。

元来、冠動脈の硬化性狭窄があり、十二、三年まえに心筋梗塞を起こしました。前日はゴルフや大きな鯛の料理(私の立場ですから、解剖かもしれません)をやりました。翌日、教授

良医を目指して 病理解剖をしよう

名誉教授 前病理学第二教授
竹林 茂夫



退職して早くも五ヶ月がたちました。この間、残務整理に追われる毎日でしたが、ようやくその方も見通しが付きつつあります。四月からは旧教室員や友人達の御配慮により、複数の病院に週四日出勤する毎日を送っています。そのため福大を離れても、まだ停年退職の実感はありません。ただ職場が変わった分だけ、その従業員の人々に迷惑のかけられないようには気を使っています。

病理解剖も頼まれれば今でも出て行って行っています。最近では病理解剖が、とくに少なくなつてきています。しかし解剖してみれば、生前の診断通りでなかったり、所見の見落や解釈の

農耕民族と放牧民族と ―束縛と自由―

前産科婦人科学教授
金岡 毅



在職二十九年間は皆様のお世話になり心からお礼を申し上げます。退職後、念願の世界旅行にでかけました。長年の束縛から離れて米国、欧州、中国、東南アジア、オーストラリアなどを三ヶ月間放浪しました。私が米国に留学したのは五十年代後半でしたが、その後若者は社会の束縛から離れたヒッピーと資本主義に忠実なヤッピーとに分類されました。今世界を回ってみると、ニューヨークのウォール街でも中国や東南アジアでも、どこでもスターバックスなどがある。コフィ・ラテで代表されるラテ・シティには、昔のヤッピーがボボ(ブルジョアとボヘミアンの合語)に変わって、経済情報を交換しています。

考えてみると、毎日、田を耕したり、物を造ったり、会社に勤めている人たちの収入よりも、コンピュータを操って時間にとらわれず、自由気ままに生活している人たちの収入の方が数十倍も多いのです。

一方、ニューヨークで四年間を過ごした大学を訪ねてみると、当時私を指導してくれた二人の教授は八十六歳と七十四歳の年齢を乗り越えて、週四回は大学に出勤して、論文を執筆しながら、アカデミックな生活を楽しんでいました。医学に対する好奇心が彼らの人生の目的で



福岡大学医学会
第四十七回例会および
第二十五回総会(報告)
日時 平成十四年十月九日(水)
十七時から
場所 医学部臨床大講堂

第四十七回例会

- 進行 黒木 政秀先生
- 一 開会の辞
- 二 会長挨拶 医学部長 満留 昭久先生
- 三 第四回福岡大学医学会賞受賞論文講演
講演一座長 朔 啓二郎先生(内科学第二)
高雄真樹子先生(内科学第二)
講演二座長 蜂須賀 徹先生(産科婦人科学)
牧野 郁子先生(産科婦人科学)
- 四 第四回福岡大学医学会賞金賞論文投票

第二十五回総会

- 進行 畝 博先生
- 一 議事
- 二 報告事項
一、平成十三年度会計報告および平成十四年度予算案
二、その他

第四回福岡大学医学会賞授賞式

- 一 投票結果
- 二 授賞式
- 三 閉会の辞

*第四回福岡大学医学会賞の開票結果、論文名および受賞者写真は四面に掲載

次回の福岡大学医学会例会は
平成15年3月12日(水)に開催
する予定です。

新 風

平成14年4月1日付けで本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。

病理学主任教授

岩崎 宏



私は昭和四十四年に九州大学を卒業し、進路に迷っていたところを菊池昌弘先生のお世話で、九大第一病理に入局し、遠城寺宗知教授に人体病理学の初歩から教えて頂きました。昭和五十二年から福岡大学助教授(病理学第二)に採用され、平成元年から教授を拝命しました。その間 Alexander von Humboldt 財団奨学研究員としてドイツ連邦共和国 Frankfurt 大学病理学研究

所に留学し、軟部腫瘍と細網内皮系疾患の病理学的研究に従事しました。

福岡大学医学部では本年四月より従来の病理学第一講座と第二講座が統合され、病理学講座として再出発し、岩崎が主任教授に就任いたしました。異なった伝統と風土を有する二つの教室の統合ということで、各方面から多大のご激励を賜りました。教室の運営は菊池昌弘正教授(副学長)、坂田則行教授(学長)、大島孝一助教授をはじめとする多くのスタッフの協力により順調に行われています。

病理学は基礎医学かそれとも臨床医学かと最近よく問われますが、この様な質問が出ることは、臨床医学としての病理診断の判定などに大きく貢献しま

教室紹介

細胞生物学

医学部基礎講座再編により平成十四年四月から旧第二解剖学と旧第二生化学が統合されて「細胞生物学教室」として発足しました。細胞生物学とちよつと聞かれない分野かもしれませんが、すべての生物の構成要素である細胞を対象とする研究分野はすべて細胞生物学です。旧来の方法で分かれていた研究分野を、対象で分けるようになつたわけで、臨床系の臓器別のような分類です。日本では「細胞生物学」を名乗る研究室はそれほど多くありませんが、米国で

は多くの研究室が「Cell Biology」を名乗っています。現在は旧第二解剖と旧第二生化学の教室に分かれていますが、年内には旧第二解剖学教室の所(医学部新館一階)にまとまって新しい研究室でスタートします。現在のスタッフは旧第二生化学の池原征夫教授以下三名と旧第二解剖の上原清子助教授以下三名の計八名の教育職員と教育技術職員、大学院生の十名で構成されています。教育担当科目は主に二年生の人体構造学Ⅰと人体構造学Ⅱで、Ⅰは分子細胞生物学と人体発生学、Ⅱは組織学です。

研究活動は当面は合併前の講座で行われていた研究を継続していく予定です。一つは旧第二解剖学講座で行われていた研究

ですが、他方で誤診は直ちに悲惨な結果をもたらします。病理診断は、一般の検体検査のように結果が装置から数値として出てくるのではなく、病理医が病変の肉眼像および組織形態を観察して、自己の知識と経験から診断を行うものであります。そのため診断の精度は病理医の知識、経験、技量に大きく依存します。私も福岡大学病院病理部のシステムを改善し、真に患者さんの利益になり、臨床の役に立つ病理診断業務を行うために努力しています。

最後に、若い医学生から時々受ける質問として、「病理を専攻しても、ちゃんとした生活ができますか?」と聞かれることがあります。全く心配無用です。これからの医師過剰時代を乗り切るには並の医者になるよりも、病理診断という特技を持つた病理医の方が遙かに有利であることはいうまでもありません。福大出身の病理部長として、国立九州医療センターの竹下盛重博士や福岡徳洲会病院長の吉田尊久博士が現在大いに活躍していますが、彼らに続いて若い人々が病理の道を選ばれることを歓迎します。

筑紫病院内科第一助教授

浦田 秀則



出身は最近レトロで有名になつて北九州の門司港です。小さいときから都市部にいなから山と海に近い環境で育ちました。趣味は中学・高校・大学と続けたバレーボールを含む運動

一般と酒を飲みながら篤く語ることです。福岡大学M五在学中に九州山口医科体育大会を始め主催したことをつい最近のころの思い出です。昭和五十五年卒業した時、循環器系疾患が増加するのではとの予感に従って内科第二へ入局しました。二年の内科研修後に大学院へ進み、荒川規矩男教授の指導のもと高血圧患者に対する軽強度運動降圧療法の機序というテーマで学位を取得しました。循環器医を経て、昭和六十一年から平成四年まで米国クリブランドクリニック、平成四年から平成七年まで独逸ベルリンのマックスデルブリュックセンターへ足かけ十年留学させていただきました。クリーブランドでは心臓移植チームに所属して米国内の移植医療を経験することと先進的な医療を実感することが出来た。その際に得られたヒトの心臓を用いてアンジオテンシンⅡ受容体の分析を行っている途中で発見したアンジオテンシンⅡ産生酵素であるキマーゼに魅せられ、この酵素の精製と遺伝子クローニングに約四年半を費やし、その後ヒトキマーゼ遺伝子導入動物モデルの作成を目指しました。ベルリンでは成功に至らず帰国後、国内の多くの先生方の援助により何とか完成させることが出来ました。一方、この酵素の阻害薬の開発にも国内外の薬品会社と共同研究を進め、最近経口可能な薬物を開発することが出来ました。このように私の人生の約四分の一は現実の臨床と直接関係しないところで進行していった。ところが、日本の某薬品会社の特許を元にデュボンが開発したアンジオテンシンⅡ受容器拮抗薬であるロサルタン(ニ

ユロタン)が一九九二年(日本では一九九五年)に市販され、しかもこの薬物が臨床的に降圧のみならず臓器障害の抑制に有用であることが明らかになりました。この薬はアンジオテンシン変換酵素だけでなくキマーゼによつて産生されるアンジオテンシンⅡの効果も抑制することから、キマーゼの役割を臨床的に実証してくれつつあります。帰国後、心臓カテーテル検査、心エコー検査、心筋シンチ等の循環器諸検査の再履修と病棟主任や研修医の指導を通じて自身の臨床面のリハビリテーションを行うにつれ(昨年内科専門医、循環器専門医を取得、前述したキマーゼの臨床的重要性を確信するに至りました。現在の循環器疾患の原点は血管病であると思います。したがって動脈硬化を進める因子(高血圧、糖尿病、高脂血症、喫煙等)をうまく管理し、致死的心血管系合併症予防と再発防止を効率良く行うことが現在の循環器医療の最も重要な課題であると思います。上述した危険因子と疾患の進展にはアンジオテンシンⅡが常に関与することが種々の基礎及び臨床研究で明らかになり、アンジオテンシンⅡの作用をいかに抑えるかが血管病患者の予後は左右するといつても過言ではありません。前置きが長くなりましたが、広木教授のもと福岡大学筑紫病院に循環器科のスタッフとして就任したからには筑紫地区の循環器医療が最善になるように努力を行いたいと思います。具体的には①地域医師会(筑紫、甘木朝倉、小郡、福岡市等)との連携を強化し、正しい循環器医療を啓蒙する基幹科としての役割を担う。②循環器救急医療を充実させ、二次予

解剖学講師

立花 克郎



私は昭和六十二年に久留米大学医学部を卒業し、研修医として福岡大学第一内科に入局しました。平成六年に奥村尚教授の赴任間もない臨床検査部で仕事を始めたのが、福大との縁を取得し、その翌年から第一解剖学教室(宮内亮輔教授)で研究・教育に従事しています。現在は超音波エネルギーの生体への影響について研究をしています。この研究を始めたきっかけは博士論文のテーマであった「超音波エネルギーによるインスリンの経皮吸収の検討」に始まり、音波エネルギーによるインスリンの経皮吸収の検討に始まり、内科の一独立部門として病院診療各科の難治性感染症のコンサルテーション業務に携わる米国立感染症専門医の活動をつぶさに見る事ができました。折しも昨年九月十一日のWTCテロ事件を現場から数キロ離れた職場で目撃し、炭疽菌テロ事件ではボスへの日本のテレビ局の取

血液・糖尿病科講師

高田 徹



本年四月から第一内科で感染症を担当しています。昭和六十二年に岡山大学を卒業後、九州大学第一内科(現病態修復内科)に入局し、臨床研修後、同大学院細菌学教室で天児和暢教授の下、細菌のイロハを学びました。その後平成六年に小野順子教授の赴任間もない臨床検査部で仕事を始めたのが、福大との縁の始まりです。検査部では広く臨床各科の分離菌を扱うことができています。平成十一年より米国立感染症学会のトップリーダーの一人であるブレイザー教授(ニューヨーク大学医学部内科教授)の下で三年間留学し、マンツーマンで研究、ベッドサイドの指導を受けました。また、内科の一独立部門として病院診療各科の難治性感染症のコンサルテーション業務に携わる米国立感染症専門医の活動をつぶさに見る事ができました。折しも昨年九月十一日のWTCテロ事件を現場から数キロ離れた職場で目撃し、炭疽菌テロ事件ではボスへの日本のテレビ局の取

学位取得

次の方は、福岡大学より医学博士を授与されました。

課程修了による学位取得者

- 陳 英 典 (人間生物系専攻)
花 田 弘 文 (感染生物系専攻)
西 尾 淳 (病態構造系専攻)
谷 博 樹 (病態構造系専攻)
山 川 晃 司 (病態構造系専攻)
上 野 雄 史 (病態構造系専攻)
吉 野 慎一郎 (病態構造系専攻)
梅 田 尚 靖 (病態構造系専攻)
横 山 裕 (病態構造系専攻)
高 橋 聡 (病態構造系専攻)
野 田 尚 孝 (病態構造系専攻)
浅 山 勲 (病態機能系専攻)
古 賀 敬 (病態機能系専攻)
松 永 和 剛 (病態機能系専攻)
財 津 龍 二 (病態機能系専攻)
本 村 禎 (病態機能系専攻)
阿 部 裕 典 (病態生化学系専攻)
上 野 あると (病態生化学系専攻)
松 本 久 伸 (病態生化学系専攻)
中 島 英 子 (病態生化学系専攻)
星 野 史 博 (病態生化学系専攻)
園 田 桃 代 (病態生化学系専攻)
堀 内 新 司 (病態生化学系専攻)
今 井 紀美子 (病態生化学系専攻)

(以上、平成14年3月22日付け)

論文提出による学位取得者

- 福 田 良 日 学外者
木 村 一 生 解剖学第二研究生
野 崎 正太郎 解剖学第二研究生
松 尾 文 恵 外科第一医員
井 上 敏 生 整形外科助手
中 嶋 敏 子 学外者
明 比 祐 子 臨床検査部助手
嘉 悦 明 彦 学外者

(以上、平成14年3月22日付け)

祝「第四回福岡大学医学会賞」



左から、黒木政秀先生、牧野郁子先生、高雄真樹子先生、満留昭久先生

金賞

高雄真樹子 先生 (内科学第二)

The associations among thoracic aortic atherosclerosis, coronary atherosclerosis and the function of high density lipoprotein

銀賞

牧野 郁子 先生 (産科婦人科学)

Phenotypic changes of adrenomedullin receptor components, RAMP2, and CRLR mRNA expression in cultured rat vascular smooth muscle cells

医師国家試験に103名が合格

第96回医師国家試験(3月16~18日実施)に本学から121名が受験し103名(新卒90名・既卒13名)が合格した。合格率は85.1%であったが新卒者の合格率は95.7%で、私立大学29校中第8位の好成績を収めた。合格者氏名および研修先は次のとおり(福大病院は科名のみ)。

金 春 華	広島大学第二外科	寺 昌 史	小児科	有 島 宏 明	循環器科
池 田 正 和	消化器科	徳 真 和	筑紫病院外科	犬 塚 宗 希	北海道大学内科
井 手 あ や こ	東京医科大学小児科	豊 田 一 弘	九州大学総合診療部	加 島 伸 浩	整形外科
伊 藤 建 二	腎臓内科	中 尾 砂 理	筑波大学産婦人科	木 脇 祐 聡	腎臓内科
井 上 浩 利	眼科	中 野 真 樹 子	血液・糖尿病科	楠 元 孝 明	循環器科
池 田 静 佳	麻酔科	中 村 厚 彦	整形外科	境 大 介	筑紫病院泌尿器科
今 泉 聡	循環器科	山 中 直 美	形成外科	下 村 保	筑紫病院外科
岩 下 英 之	消化器科	西 尾 絃 子	久留米大学産婦人科	竹 元 英	鹿児島大学精神科
田 中 謙 太 郎	精神科	西 村 寛 子	奈良県立医科大学消化器内科	玉 井 路 加 子	腎臓内科
江 崎 公 香	消化器科	西 元 久 晴	北里大学眼科	町 田 稔	循環器科
大 西 克 樹	耳鼻咽喉科	服 部 愛 子	筑紫病院内科	光 武 孝 倫	外科第二
大 野 直 義	国立長崎医療センター	林 ち は る	循環器科	矢 田 正 幸	消化器科
岡 田 素 子	皮膚科	平 井 孝 直	麻酔科	馬 場 尚 樹	整形外科
岡 本 恵 理 子	麻酔科	平 山 貴 視	外科第二	井 上 義 彦	久留米大学皮膚科
尾 崎 倫 子	麻酔科	福 島 隆 生	腎臓内科	淡 河 治	外科第二
薩 地 啓 市	広島大学内科第一	福 田 直 佳	循環器科	竹 嶋 亮 太 郎	眼科
唐 島 大 節	整形外科	藤 田 英 治	消化器科	増 田 智 博	筑紫病院消化器科
木 谷 嘉 博	循環器科	藤 村 成 仁	筑紫病院消化器科	市 川 大 輔	耳鼻咽喉科
草 場 留 美 子	久留米大学眼科	藤 原 千 鶴	小児科	伊 藤 慶 彦	順天堂大学精神神経科
桑 野 孝 志	循環器科	前 田 晋 至	九州大学総合診療部	中 下 尚 登	内科第四
児 玉 隆 志	小児科	前 山 彰	整形外科	坂 本 紬	熊本大学総合診療部
佐 々 井 秀 子	山口大学放射線科	牧 野 太 郎	形成外科	坂 本 達 彦	眼科
志 賀 洋	消化器科	眞 柴 晶 子	皮膚科	土 井 康 郎	熊本大学第一外科
篠 崎 夏 樹	千葉大学脳神経外科	榎 屋 愛	血液・糖尿病科	広 岡 邦 彦	岡山大学整形外科
種 村 佑 美	広島大学麻酔科	益 山 紫 鶴	血液・糖尿病科	福 嶋 隆 一 郎	熊本大学循環器科
下 里 直 隆	奈良県立医科大学内科第三	松 尾 静 香	筑紫病院内科	水 野 尚 之	広島大学整形外科
高 田 和 英	消化器科	松 山 浩 子	神戸大学精神科	村 岡 総 一	循環器科
高 濱 宗 一 郎	国立大阪病院内科	丸 田 大	長崎大学泌尿器科	柳 元 孝 介	鹿児島大学小児科
高 村 知 央 子	長崎大学眼科	光 武 良 晃	循環器科	上 田 泰 子	放射線科
武 岡 宏 明	九州大学総合診療部	三 原 誠	虎の門病院外科	佐 伯 光 崇	岡山大学整形外科
張 昭 徳	整形外科	三 宅 仁	奈良県立医科大学脳神経外科	白 地 仁	整形外科
多 田 光 太 郎	岡山大学皮膚科	宮 脇 喜 一 郎	京都府立医科大学内科第三	水 間 聖 子	皮膚科
伊 達 亮	山口大学整形外科	村 上 文 野	産婦人科	吉 田 健 郎	岐阜大学第三内科
寺 谷 威	整形外科	森 安 善 生	小児科		

長い間

ありがとうございました。

ございました。

(平成十四年一月一日〜九月三〇日まで退職された方)

○三好萬佐行 教授(解剖学第二)

定年のため

○竹林 茂夫 教授(病理学第二)

定年のため

○金岡 毅 教授(産科婦人科学)

定年のため

○岡 一成 助教授(脳神経外科学)

山元外科病院へ

○桐生 美麿 助教授(皮膚科学)

北九州市立医療センターへ

○諸江 一男 助教授(筑紫病院内科第二)

家業継承のため

○山下 信哉 講師(解剖学第二)

開業のため

○伊藤 正訓 講師(精神神経科)

開業のため

○谷川 攻一 講師(救命救急センター)

広島大学へ

(大学院医歯薬学総合研究科救急医学教授)

○田原 春夫 講師(泌尿器科)

西福岡病院へ

○濱田 雄蔵 講師(外科第二)

及川病院へ

○鈴木 智美 講師(精神神経科)

(以上、三月三十一日付け)

○孟 晶 助教授(病理学)

エール大学へ

(以上、六月二十三日付け)

○上野 伸哉(薬理学)

浜松医科大学へ(生理学助教授)

○福島 哲仁(公衆衛生学)

福島県立医科大学へ(衛生学教授)

(以上、八月三十一日付け)

